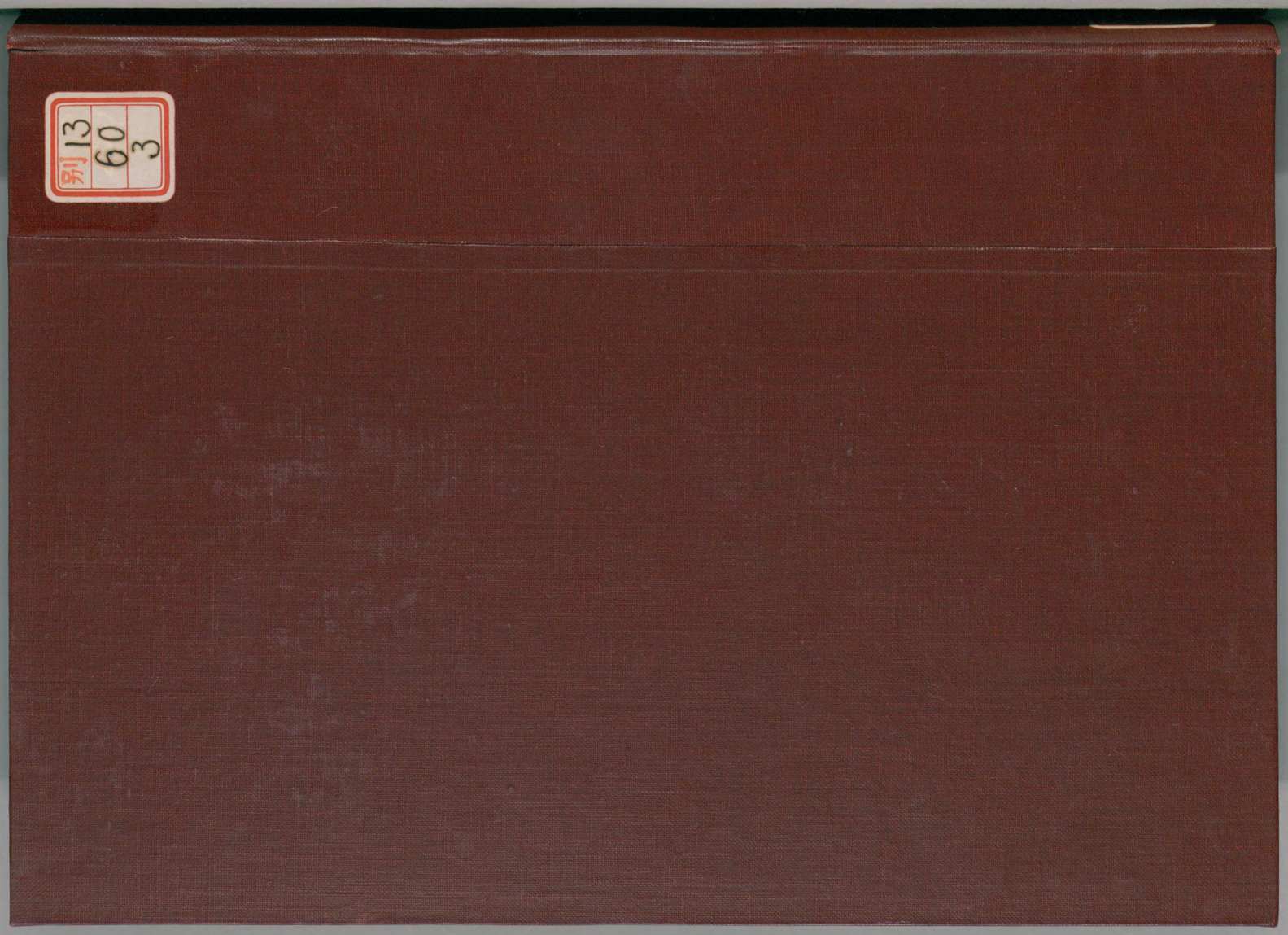

別13
60
3

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

108
259

35.6 15

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

108
259

宿命

狂風

第(一)

九十九枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

108
259

2

狂風

「先生は最う(もう)お帰りになりましたか。」と言って田舎の玄関に立った青年は薬局の主人を伸(のば)し上(あが)るやうにして覗(のぞ)いた。

「お帰りになりました。御用でございますか。」

「あの大野(おほの)さんでございましたね。」と云ひながら女中のお菊(きく)は奥(おく)の方へ入(はい)つて行つた。

大野(おほの)は表の方へ着(き)物(もの)を着(き)換(か)へて、「オイ、未(ま)だ終(をは)らないか。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

3

。餓ら帰ってるよ。」と言って一寸手招いた。
すると法被を着た職工風の男が三人、軒燈の
明りを氣にしながらやって忍び寄って来た。
あが
たと思うと、物に追はれたかのやうに体裁へ
駈け込んで来た。

「そんなにビクビクしないでも宜いサ、此
家は医者の家だよ。我々は診察して貰いに来
たのだやないか。」と大勢は淋しい笑を見せた。
円顔の職工はニヤリと笑った。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

4

土産の一室を
生徒たちへ
大八畳敷の室

「おおう、大野君か、既う鳴野君は疾うから来とるよ、裏へ行って呉れ給へ。」と云って田舎は奥へ引込した。

勝手を知った大野は三人の職工に目配せして、風呂場の前を通って臺所の硝子戸をあけて、漆喰の上をカメラトと裏の廊下に鳴野が居た。臺所には薪竈らしいのがあって、その上に鍋と釜とが所在無さそうにたの掌に顎を載せて小い四角な火鉢の縁に肱を突いてみた。

「おう、来たか。上り給へ……」

辻君や桜本

108
259

5

君は？」

「ええ、一緒に来ました。」と大野は声を潜めるようにして言った。

四人は火鉢を中にして坐った。鳴弥はかしこまった様子で肩を怒らしてでもいるような大野の顔を覗き込んだ。

「益々大変な事を聞込んだのです……」と大野が一寸姿勢を直した所へ電灯がパッと点りました。

「障子を開けて入って来ながら、暗いねえ。」

ラップは心と言った。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

6

□暗くっても宜しいですよ、誰は囲えますか
ら……心と鳴野はサしく大野の方へ躍りよつて、田圃に降を譲つた。
□失敬！心と田圃は一同に一寸舎擇して、
□大野君、甚後どうしました？いよ〳〵決行ですか。
□えエ、決行する事になりました。五工場までは皆な結束しまして。
□ふん、第五工場は加入しないというのか。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

帰ろ。

いいエ、弟。工場の職工は人員も少いし皆な我々の説に同意して居るので、全く秘そとは関係の無いやうに見せかけて、そして内部の事情を悉皆我々に知らして呉れる筈なんです。でなければ重役達が中でどんな事をするか知れませんから……

さうか、それは好都合だ。そして内情は一体どうなってるんです？

掏摸んで言って

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の斯うなんです、彼の工場では毎月我々職工から五十銭宛の積立をして夫れを相互扶助の共同基本金として積んであるんです。所が先の社長が二年間も肺病で臥て了つて、孫に會社の事務を見なかつたもんだから、甚間に重役の悪い連中が甚の共同基本金をまーて了つたんです。藝妓買をしたり妾宅を構へたり、甚かしきは靖国神社の来を引出して賣つたりしたんですもの、大ぜいで我々職工から甚の精算を迫つたのです。所が今の社長は走ト

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

9

仕事(しごと)が忙(いそが)しくて何(なに)にも会社(かいしゃ)の内情(ないじょう)が解(わか)らない所(ところ)へ、重役連(じゅうやくれん)がいろ〳〵誤魔化(ごまか)しを磨(みが)くもんだから、社長(しゃちょう)旨(うま)く捲込(まきこ)まれて了(しま)ったんですよ。夫(それ)に比(ひ)べ幸(さいわい)に頭(あたま)の堅(かた)い人ですから、職工(しょっこう)の今陰(いまかげ)として決算(けっさん)を迫(せま)るなんて事(こと)は仕(し)ないらしいんで(だんぱん)す。我々も最初(さいしょ)は手(て)こずりましたが、どうも埒(らち)が明(あ)かないので、とう〳〵決行する事にしたんです。ですから今晩は一つ先生の指揮(さしず)を仰(あお)ぎまして参(まい)りました。」と大勢(おおぜい)は右に坐(すわ)ってみる三人を顧眄(こべん)きながら、口(くち)の方(かた)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

が第四工場の松本君、
君、其次が第三工場の辻田君、……」
三人はどうぞ宜しく、……」と声を揃へて
言つた。
「一致とい子供にはよほどしつかり臍を固めなきやア
ない連中から、餘程強く
すまし
直ぐ碎けて了ふよ。」と鳴野は腕を組み乍ら言
つた。
「夫れは大丈夫です。」と角も第一から
第五までの工場全体が寄調を揃へてゐるんです

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

11

から。」と大郎は三人を顔みながら
言う。
「兄貴、もう大丈夫だぜ。」
「ええ大丈夫です、第三第四工場が中心に
なって飽まで戦います。」と辻田は横激したや
うに言つた。
「では斬ろう。」と田原は
鳥鎗の大箸を一本抜いて大水で軽く火鉢の縁を
打きながら、「第一は先づ職工全体が団く
団盟する事。第二には諸君が平常の通り労働
して重役に対して交渉委員を擧んで穏やか

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

12

談判

解決する事、夫が上策。

で、どうしても解決出来ない時は外命からも

――鳴野君のやうな方に頼んで交渉委員に

なつて貰ふんだね。夫が中策。第四には、

どうしても死去や重役が頑固で承知しないなら同盟して罷工するのサ。そして新聞でも況く安警察法十七条に抵觸しない範圍で大いた

慫慂するんだね。ゼネラルストライキとか、

直接行動とかいふ言葉の流行する今の時代が

から、これを一地方の事件にしないで日本の

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

時々（ときどき）問題にするんだね。しかし其時程注意して
やつて欲しいもんだ。ストライキとえばすぐ
営業妨害（えいぎょうぼうがい）なんて事を忘れるのは不
子やうなサボテージをやる事だと思ふのは不
可い。正々堂々（せいせいどうどう）とした、本当に正義（せいぎ）を施行と
こたストライキをやつて欲しい。ストライキ
といふのは最後（さいご）の手段（しゅだん）だから、夫（それ）を理想的（りそうてき）に
やつて筈（はず）を未（ま）すんだね。さうすれば、ストう
イキといふものの意義が解る。ストライキと
いふものは正当（せいとう）の要求（ようきゅう）を正当（せいとう）にするものだと

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

い子事を知らさねばならない。
不正な行為(こうい)です。ストライキは失敗(しっぱい)するのが
当然(たうぜん)であり、そんなストライキの起(おこ)る事は国家(こくか)
の人数(じんずう)の不祥事(ふしょうじ)だから……甚(はなは)だしく所(ところ)を能(よ)く考(かんが)へて
堂々(どうどう)とやつて呉(く)れ給(たま)へ。
田原(たはら)は殷々(いんいん)と大(おほ)きく振(ふ)り上(あ)げ、熱誠(ねつせい)を籠(こ)めて言つた。一同(いちどう)は皆(みな)な黙(だま)つて聞いてゐた。
曰(いは)く諸君(しょくん)、斯(か)うしませう。と鳴野(なるの)は元気(げんき)な聲(こゑ)で、明晩(みやうばん)から此(こ)の事務室(じむしつ)を借切(かりきり)つて

不當な要求を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

15

実地運動に着手しよう。今日学先生の仰しやつた順序に従つて、先づ上策を講じてみるのだ。で、其の宣言書を職工全体に配付しよう。どうせ下策も下々の策を施さなきやア治まらないから、事件の内容を記載した印刷物を株主全体と町内の有志へ配付する今も、更にストライキの宣言書と、未れストライキの規約とをおやろな仏像を書いたものも一緒へ印刷して至く、そして裏面をそしないで、ガツ〳〵やつて行くのサ。同文

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

電報で京阪の各新聞へも通信してね。模範的ストライキとは
にやってみようじゃないか。ストライキとは
へは直ぐ乱暴を連想する連中を驚かすんだ
。ナーに程ストライキとは
意心させなければ労働問題
よ。日本にも将来は
うか、ストライキは
ゝ、模範を君々が示す
く、先生、此宅を倹して下さいませんか、表
のうちには当人をしないで、此の裏の川辺から

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

17

じだん石段を降りて出入するようにして……先生は決して此連中はかけません。鳴野は未だ戦はない前から覚悟もしかりあるらう。

まやうた昂奮してみた。

田夫りやア此宅を使つても宜い、しかし飯ほとは注意をしないと駄目だよ。此度裏切るものが出て来たり、血気に逸つて乱暴するものが出たりするからネ。

田夫は気遣はしさうに述べて一同を見まは廻した。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

1918

「然うです、其邊は餘程注意してやります。
「法律顧問としては大野は誠意を籠めて、「心配の末南さんに、文書偽造として鳴野さんには面倒を見て戴くわけには行かないでせうか。」
「南君に賴むのも宜からう。」と鳴野は困惑の色を見ながら、「文書偽造には多少の時日を要するから、信吾をしてみる大川流二君を賴んでは如何でせう。」
「さうだネ、何れも適任でせうが……」しかし仰有るとすると、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

式行アキ

白僧の（なこしやはく）
川雲水（雲水）がある（ある）のうちをもつてまて
明晩（めうばん）から仰（とう）刷しよう。三仆（さつ）も刷（す）れば十分
でせう。
鳴（なる）神はたも愉快（ゆくわい）さうに暁（あけ）を揺（ゆす）りながら言つ
た。一座（ざ）のうちには未（み）知の妾（めかけ）を貰（もら）つた
やうな（やうな）即（すぐ）席（せき）の空気（くうき）が充（み）ちた。
よく晩（ばん）
翌晩から田圃の裏（うら）畦（あぜ）数（かず）では
ヒソ〳〵と
誰（たれ）かが洩（も）れた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

ばせたり、ポスケットを鐘のまし持たせてやったりすると、田舎はたいそうさびしきちっとも裏坐敷へおばの大野も朝から晩まで顔を出さなかった。鳴野もあるのに

でにいくと何か計画しているらしくつだが、故ら表つは出て来なかった。

さうして四日五日経つた後で、田舎の親戚くまのせいたいくらいしやあとはらいえいの内部に小紹援あるものいかんしようおうたく五名社長宅を訪問し何事か交渉する所ありたりと。えめんとしも短い報通をした。しかし其の

(縦二〇(縦糸下山田紙)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

108
259

21

のである

執つた。製材会社の職工連は朝疾く王子ヶ濱に集合して同盟罷工を誓つた。鳴野は小高い

とろ〳〵上筆も中筆も行はれないで下筆を

導で持切つた。

長の無能、重役の横暴などが詳細に指摘された。夫れは社

い暁室報の印刷物が配付された。

り. 株をへは何所から誰が鼓吹したとも知れな

した一紋半の記事が掲載された。同時に町内

曙日の紙上では能野製材会社の内情と暁

（編二〇〇）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

22

サ丘の上に登って厳粛に
して 我等は飽まで紳士的態度を守り決して
ふ法乱暴の行為をなさず 正々堂々正義を旗印
として此の同盟罷工を遂行せん事を期す。と
いふ条に力を籠め一段高く聲を張上げた時、
職工全体は破れ〻ばかりの拍手を以て聲同の
意を示した。
一同が大野の鼓声につれて市歌を三唱して
解散したあとへ、今北側の通路に接した警察
署からは警部巡査数名駆け付けた。しと見え

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

かし彼等は唯砂の上に残された雑踏の足跡を見たばかりであつた。

甚日の午後舎北から大野松辻田等十二名に解傭の通知を出した。そして若し三日以内に御詫をしない職工は悉く解傭すべしとその通信は職工会体に致した。

さア事件は益々紛糾して来た。田宮の新聞では弦と会面を舎北坂峯に用いた。草麦タイムスも毎号其の第二面全体を大川流二の通信

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

文掲載に提供した。えし
だいえんせつ
大演説會を開く事になつ
は
て町の辻々には大き
な廣告が貼られた。辯士は鳴野、田原、大野
まつもと つじじ
、松本、辻田等であつた。
おお
戰工風そ五色名程は演説會の前日から町内
を整つて町内に手風琴
鉄ぶち眼鏡の鼠を先に
あまえの鼠がソロ〳〵と
かぶる共同老本金
猫が見つけてストライキ！

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

25

という説を皆面白く合唱しながら町中を練り歩いた。社長はいつも鉄縁の眼鏡をかけて底意地の悪そうな笑顔をして、金縁は謹厳な紳士で勤倹貯蓄を説く人であった。

一隊は何度も繰り返しの能野製材会社の前へ押掛けて行って萬歳を浴せかけた。しかし二回三回からは彼等萬歳と呼ぶかわりに、

「能野製材会社アホーイ！」と叫ぶのであった。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

26

（原稿用紙 二〇字詰 横書 下田製）

おとなし
音無が日曜(せっしゃ)毎(ごと)に牧師(ぼくし)の導(じゅん)備(び)をしてゐる所(ところ)へ警察(けいさつ)
署(しょ)の小使(こづかい)が入(はい)つて来(き)て、今(こん)晩(ばん)お出(で)で下(くだ)さる
様(やう)にと申(もう)しました。心(こころ)と言(い)ひ置(お)いて直(すぐ)
アタフタと出(で)て行(い)つた。
何(なん)ならう？まさかストライキの事(こと)では
無(な)からう？と呟(つぶや)きながら羽織(はおり)を引掛(ひっかけ)けて急(いそ)
いで警察署(けいさつしょ)へ行(ゆ)つた(てみた)。
おとなし
音無は

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

27

玄関の所へ行って行った時、
事務室で横田署長は音無の方へ背を向けて、大きな話ら顔の声で笑げた男と頻りに低声々と話をしてゐた。
「其れは職工達の書いたものの中ヤ無い。」
夫れは署長の声であった。
「無論、此のストライキの張本人は外にあるのだ、其の張本人は言はずと知れた……」
話声の男は急に声を潜めた。
「其様な事は無い。僕もさう思ふ。其様な事は絶対に無いさうだらう。僕もさう思ふ。其様な事は絶対に無い。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

用紙を職工達は使やアこ
ない。」
署長(しょちょう)が斯(か)う言った時、
と 音無(おとなし)の右手(みぎて)に筆(ふで)を
執(と)ってみた当付(うちつけ)の巡査(じゅんさ)は何(なに)か御用(ごよう)ですか。」
と辞(じ)かに訊(き)いた。
「ヘエ、今、署長さんから召喚(しょうかん)に来(き)て居(お)れ
といわれ使でしたから、」
「あ、さうですか。」と巡査は署長に報告(ほうこく)す
べく起(たち)上らうとした時、
「まあ、振向(ふりむ)いて、」
「おう、音無君、どうぞこさらへ、」と
横田警部(よこたけいぶ)は後(うしろ)を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

故意と声高く言つた。斯坐
を状袋の上に一緒に書いて、未
亡の左様なら、先ア萬事宜しく……と云つ
て音無と招造ふやうに出て行つた。音無は心
の中で可哀相に製材會社の重役津本だナ。と
思つた。
四ツ五ツも即苦労でした。
て……と常長は叮嚀に挨拶して、四方知
の通り製材會社のストライキは困つた事な
ものです。明日一日でも出、勤しないものは

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

宿命

明後日から愚昧解雇と會社側では明日の晩職工側では明日の晩

すといふ。今の所では何方も強硬で爭議の始末が、職工側も田原君なのと

るのだ。今の社會を變革せんとするのは不可能だ。今の社會を變革するのは

いふ社會を我々は破壊しなければならない。君

ろ云ふ連中が一緒に演説をするとなると、警

參の方では嚴しく取締らねばならない。君

解散もするし職工連は益不平不滿が爆

茂して事態容易ならざるを惹起すかも知れ

しかし演説会
も
かも
解散
はつさ
茂して
事態容易ならざるを
何んな

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

ない。だから君に命迄(までも)賭(かけ)る程の友が、あのストライキの裏切人の一人と見られてみる辻田(つじた)という男は、あれは君の所の教会員だと。

いろ話たから、牧師である君から一つ説きつけて、重役側と何とか話を手打(てうち)に仕付(しつけ)るや うにして呉(く)れまいか。僕も仲に立つ心算(つもり)だから……夫(それ)から君と旧友(むかしとも)「栗君」とは昵懇(じっこん)らしいが、旧栗君に話をして明日の晩の演説会は労働者ばかりの演説だすやうに……其(そ)処を君から一度の意見(けん)を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

32

と云う事をお聞きして、能く相談して見た上で
何卒君、一つ御盡力を願ひます。
署長は自分の立つ本元
扱き方から何事も〳〵軽く頭を下げた。
口辻田君は教會員ですが、もう半年以上も
教會へ出席しないし、とても感心な
ホまらか、先ア左様の
して置きませう。夫れから田舎の君ですネ。あ
の人は或は風知するかも知れませんが、鳴野
君はなか〳〵耳を傾けないから〳〵と思います

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

二行アキ

が、うっとし山

の先ア、一つ意力して呉れ給へ、此所で死舎を我者がストライキを起したなんて言ふては困る。山

署長は口を一文字に結んで音無の構を見詰めた。音無は署長の苦心にも同情したが、田舎の署や鳴野の意向を手先のみにして能く飲込んで帰るは辺は此の誌判が途を不調に終る事を知つて居た。

(横11〇 (東京文子三田製))

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

音無は警官を出て直ぐ田辺の所へ行って見た。丁度往診から帰って火鉢の前に寛いでコーアを飲んでみる所であった。

「今日は全権公使といふ格で来たんだがネ。」と音無の言葉の終らない間に田辺は変顔に

「警察からの……臨時使節からうの、山とか。」

「音無は少しく機先を制せられたやうだ、もう誰かからお聞きましたになり

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

「夫りやア君、天眼通だもの……」と田夫、

は可笑しさを堪へるやうにして、「の實僕は昔、

前傳の上から君が警察署へ入る姿を見たんだ

よ」と言って、フ、、、と笑った。

「然ですか、實は横田署長が僕に斯う言

ふのです、此のストライキに私を我者が混

つては勞働者の不利益になるから、あなたと

鳴野君との演説を明晩見合して呉しいとい

ふ御話でしたが……夫りやア到底出ない相談だから

うとは思ふが……」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の償は別に演説をしたいと言ふわけぢやア無し、差捨えても宜いが労働者が貰くまいて……夫れから鳴野君も風知しまい、演説して中止せらるれば夫れまでぢやが。

の僅もさう思ります。先ア夫れ丈け片耳に違えて置けばいいのです、全権大使として も本國の意志を取次げば夫れで使命を終つたのだから……

の所が音無君、一つ困つた事が起つたんだよ」と田原は猫板の上にコップを措いて、の

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

37

今日は訪問先で面白い話だが、職工の中に不心得な男が居て、重役の津本という男に賀迫状を送ったんださうな。」

「若し明後日晩の一人にでも解傭を言渡したなら壱揉の禿頭は甚日土壇から離れるでしょ！」

「ッてえと意味で脅迫する訳だね。」

「最初から甚だ不穏な文句だ。」

「言い含めてあったのだが、どうも捻かけの功名をしたかる奴があって困る。」

「津本ッて人にの、音無は急迫むやりた

108
259

35

訊いた。彼の津本……

「うん、重役でもなかノ、今まで部長でも署長でも皆な、彼の家の御嬢を伺はねば此の町で仕事は出来なかつたも んだ。」

「津本つて、彼の赭ら顔の大きな体格で……頭の禿げた……」

「さうだ、君はマダ知らないのかい、彼の有名な男を。」

「知らないんだが、……では今日警察署で見

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

たのは夫れ決ってる。」と言葉は優りで勉強
いた。
「鏡家當店ね、」と旧家は言葉忙しく訊き
いた。
「ええ、私が行つた時、丁度甚の津本だと
男子人が署長と封筒に坐つて……何万の紙
に書いたものを出して……繰ってます、署長が
これは職工達の書いたものやア無い、甚孫
な契約用紙を職工達は使やアしない……と言
つてみました。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

の原稿用紙？　其の迫れか原稿用紙に書いてあつたらしいですか。」

の確かに然うでした、青い罫の入つた小形の紙でした。」

「ふん、そして君な夫を見ましたか。」

「青い罫の小型の？」

「ええ。」

「ふん、そして其男は、此の際事人な言はおと知れた……とか何とか言つてましたか。」

「ふーん、」と田原は暫く無言で居た後で、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

41

イと起つて書斎の方へ行つたが、直ぐ帰つて来て、勝手の所で女中に指図をしながら五つになる丈太郎を片手に抱いてビスケットを焼いてゐる妻の方を見ながら「おい、お机の上にある奥様用封筒がどうしたんだい、知らないかね」「南さんが持つてらしつたわ、昨日のお正午頃……」「おかしいな、夫れを渡したのか」「えエ、此間貴方が南さんに百枚お誂へ遊ばした……」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

ろいてお約束なすつたお
ゆうべ、約束した、忘げたのが悪いとそう
そんやないさ。事書に認めたのかつて念を押
こたのサ。
ゆえエ、確かに校了ましたワ。
ゆ 然うか、と電話にに行
つて、、、

108
259

の人間なつこやうな感じがするネ、……ううん、やるよ、大いにやるよ。終り違つたら君に謝罪を乾むよ……うん美人品なけでも宜いから……時にネ、変な事を聞くやうだが、昨日の正午、君は僕ん所の下男に頼用事を持つて帰つたらう……いや、持つて行つたのは宜いんだが、夫を君は最う使つたかい……マ外一枚も使はない、さうか、夫なら安心だ。実はネ、童役の津村の所へ下男に頼用事……青い四刻の下男に頼用事……青い四刻の下男に頼用事と無心を言つて、迎つれ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

ものがあると思いたんで、或は君かも知れ
んと思つてネ、ハイ、ハイ、と答へたら
たはら 田原は快活な声をして
そしてストライキに就いて種々な話をしてゐ
る所へ、表に俥の停まる音がしたと思ふと、
玄関で駈込んで来る下駄の音がした。
「急患だナ。」と田原は
から外を透して見ようとした時、
へ入つて来たのは南であつた。
「呼!」と田原は眼を円くした。
夫れは何

108
259

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

45

等かう事件を豫想したが
口説も外(ほか)に来た庄やしないので、心と南は四辺(あたり)
を見廻(みまは)しながら、口説(くどき)申譯(まうしわけ)の無い事をこれ
のでー-ー-ー-ー
口何ですす、心と北条(北条)は坐様(おすまい)を直(直)した。
口実は-ー-ー-と言(い)ひかけて音無(おとなし)くなりながら、口音無(おとなし)く居(を)た
う-ー-ー実は豊吉(おとた)から勸(いた)だから揚(かま)はないでせ
の上に置(お)いてあつたのです。所が昨晩僕は煙(けむ)
く帰(かへ)つて何(なに)も知らなかつたが、最前(さいぜん)お宿(やど)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

46

があつたあとで、甚の卒爾紙を見ると十枚ばかり上の方を使つてあるんでせう。で、常な留守番をしてゐた爺ハ、誰がこの粟稲用紙を使つたのかと問ふたん・ですす。すると爺はニコニコ笑つて居るて何も言はないんでせう。段々と叱つたり嚇したりして聞糺すと、昨日舎弟の職工長をしてる大石と云ふ男が来て夫れを使つたとゆふんです。」

ゆふん、どんな事に使つたんだい？」と田舎

は顔色を変へた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

47

の夫が怪しからんのだ。大谷は其の手紙を
よろし　つもと　あんさつ
用紙へ津本を暗殺するの、其の兇所が土壇
と　おおやく　ら　ひ
ら飛ぶのって無暴苦茶な事を書いたんださう
な。」
「では、いよ〳〵夫れだ！」と田辺は凄い
めつき　まきな
やうな眼付で音無を見た。
「音無君は夫れを即刻私ですか」と南は音
なし　きぬ　ほお
無の方へ向直った。
「ええ、最前警察署で、其の津本やり手人か
さいぜん　けいさつしょ　つもと　らしい
ら警長に見せてみたのが確か夫れらしいと思
けいちょう　おそ　たし　それ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

48

つたすてす。」

「ふーん、」と南は大息を吐いて、「君の母堂(おふくろ)は稿執に書いたものを津本は帰朝(きちょう)なさいましたか。」

「いいえ、懐(ふところ)へ岩礁(がんしょ)れて帰りました。」

「さうか、そんなら償はこれから行つて、津本の前に這実(はつきり)ばつてでも其の賀状(きょうじょう)を貰つて来る！　さうしなけりやア先も申譯が無い、左様(さよう)なら！」と坐(ざ)を起(た)ちかけて、「君し津本が承知しないやうだつたら泥棒手段(どろぼうしゅだん)も辞(じ)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

つても甚の腎迫状を奪い返しますが……」

「名義を借用するかも知れませんよ、地さんに迷惑はありますまい？……」

「どんな事に利用するのか知れないが、僕の言う事なら、猫の家の人達は大抵承知するから……山田氏は沒交渉で南を見上げた。南は静かに火鉢の前へ坐るやうに腰を屈めて、

「元のまゝ人お取りします」

「津来は熊野銀行の事務取締だから、あの

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

108
259

銀行の内幕は僕も少々知つてゐるんだから、心じやあ強情を張ると大地主の貯金を五万なり十万なり取出すことは、大からに取出す事と云ふ様な大得意が五万なり十万なりを取出しに行くから、と云つて、今、あの銀行から大地主のやうな

108
259

出て行ったが、引違(ひきちが)いに鳴野と大野とが入って来た。

「先生！　事件(いけん)は面白くなりましたよ。」

昨日の演説会は面白いですよ。」

なるの鳴野は激昂(げきこう)を装(よそお)うが先生プーと頬(ほお)を膨(ふく)らして吐(は)き出(だ)すやうにして火鉢の前に坐(すわ)った。大野(おおの)は上り框(がまち)に腰を掛(か)けて下駄の緒で踵(かかと)の辺(あたり)を突(つつ)き乍(なが)ら、

「トンく言はせてみた。」

「しっかりやって下さいよ先生(せんせい)、明晩は……」

「鳴野(なるの)は左(さ)の腕(うで)を擡(もた)げやうにして言った。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

（二〇頁参照）

（償は明晩、演題は「心を養ふ」大変諸君を
裏切るやうで濟まないが、先ア勘忍して呉れ
給へ、事情は後で話すから……）

田舎は依然として火鉢の火を見詰めてゐた。
なるの鳴野は呆木たやうに田舎の顔を覗き込む。

（演題をなさらないで、今一息といふ所で
我々が手を引いちやア、労働者側の負けになり
ます。明晩先生が演題をしないやア、九仞
の功を一簣に欠くといふ事
を仰しやらないで、どうぞ出席して下さい。）

108
259

いこの塔（お）合、
社舎至我者が正の運動
に加なるとゝ車は、運動の居た不利益（みりえき）を来（きた）
すかも知（し）れない。我々は主動が在の中に実行（じっこう）
せう（りそう）と理想が現実（げんじつ）に
やむを得（え）ず、理屈（りくつ）丈（だけ）は
が矢面（やおもて）に立（た）たなくとも宜（よ）いから
ず採決（さいけつ）を押（お）けれて居（を）なが
ら、ぬき打（うち）的（てき）に
突（とつ）然（ぜん）
しかし先生が今までの主義の宣伝（せんでん）にすれだ
です、理屈はどうにでもコヂつけられます。
田夫（でんぷ）を先生、理屈（りくつ）丈（だけ）ではもう
弱（よわ）い所（ところ）を突（つ）かれます。
しかし先生が今までの主義の宣伝（せんでん）にすれだ
サ採決（さいけつ）を押（お）けれて居（を）なが
ら、ぬき打（うち）的（てき）に
突（とつ）然（ぜん）
弱（よわ）い所（ところ）を突（つ）かれます。
しかし先生が今までの主義の宣伝（せんでん）にすれだ
です、理屈はどうにでもコヂつけられます。
田夫（でんぷ）を先生、理屈（りくつ）丈（だけ）ではもう
やむを得（え）ず、理屈（りくつ）丈（だけ）は
が矢面（やおもて）に立（た）たなくとも宜（よ）いから
せう（りそう）と理想が現実（げんじつ）に
すかも知（し）れない。我々は主動が在の中に実行（じっこう）
に加なるとゝ車は、運動の居た不利益（みりえき）を来（きた）
社舎至我者が正の運動

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
259

実に先生の居に居ない、僕は日本の労働問題を解かんし法史の一頁を飾る者に先生の様な弱い事を仰しゃっては困ります。先生、どうぞ其様な弱い事を仰しゃらずに、昨晩はゆっくりとやって下さい。ここで我意の主義主張を貫き通して下さい。我々は人数の多いに……に……に……弱き者の為に、……に先生の為に、……に……に……に

108
259

「鳴海君、」と音無は甚袖を叩つながら、田東さんにも辺つた事情があるんだらうが、先づ然う言はないで、……一也

「音無君、君は黙つて居て下さい。僅達は君を信用して居ないんだ。君をどう欺のと言ふんぢやア無い。しかし君の様な常識の発達した男が夫りやア君の人格を疑ふのは人情の常さ。今日も今日で常長なんぞ呼んで、辻褄にして和意の体情を探りに来たのは君と与子ものを

やらう？　だから横田警部は君を橋にして和意の体情を探りに来たのは人情の常さ。今日も今日で常長なんぞ呼んで、辻褄にして和意の体情を探りに来たのは君と与子ものを

中華(1類)10（東京下山田紙）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用

108
259

二言目には敎会（きょうかい）とか言（い）はれるとうだ。僕は君と個人（こじん）として親（したし）しく交際（つきあ）ひ、しかし君（きみ）の上からは僕（ぼく）は唯物論者（ゆいぶつろんしゃ）、君は有神論者（ゆうしんろんしゃ）、どうしても一致（いっち）しないから、……」

音無（おとなし）は何（なに）か言（い）はうとしたが、田原（たはら）は夫（それ）を遮（さへぎ）つて、田原に角（かく）倩（せん）は明晩（めうばん）演説（えんぜつ）をしないで居（を）れば善（よ）いがネ。」

「馬鹿（ばか）！」と田原（たはら）は舌打（したうち）して、「君（きみ）も演説（えんぜつ）をしないで居（を）る事（こと）は無（な）いが、兎（と）に角（かく）君（きみ）は演説（えんぜつ）をしなければ成（な）らんのだ。」

「成（な）らんのだ！」と音無（おとなし）は田原（たはら）の言葉（ことば）を繰返（くりかへ）して、「成（な）らんのだ！」

「成（な）らんのだ！」と田原（たはら）は音無（おとなし）の言葉（ことば）を繰返（くりかへ）して、「成（な）らんのだ！

108
259

可鎗が降つても火が降つても僕はやります。僕なぞの場合決して暗殺に訴へません！山と言ひ允ら起上つてのた採なら！」

田圃は俯向いたまゝ「言つた採なら……」

鳴野は大野と律義につゞいた。

引開けたまゝ総を開めもせずに出て行つた。

田圃は二人の後を追つて悲しさうに仕方が無い！」と言つた。

残つた二人は黙つて火鉢の両方に対座つて居たが、暫くして電話がかゝつて来た。ハー

南から

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

58

、ハ と 立 辜 ばかり して 周い て 庄 た 田 辜 は 、
ロ りやどうも 有 難 ろ 、 さよなら 心 。 と 言 つ て 電
話 を 切 つ て 、 ロ 清 本 は 、 そ う (其 の 留 迫 状 を
南 君 に 返 し た さ う な 。 と 猶 々 安 神 し た ら く 言
つ た 。

ロ さ う で す か 、 夫 を 宜 か つ た 。 と 安 堵 の 息 を 吐 い た 。

ロ し か し 夫 を 見 た 警 官 の 顔 の 中 に 残 つ た
印 象 は 何 と も す る 事 が 出 来 な い か ら ナ 。 と 田
辜 は 頸 筋 を 掴 み な が ら 言 つ た 。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

翌日の演説会には、
せかつた。演説会は鳴野の演説半ばで中止
解散を命じられたとい
つて知つたのであつた。
三日目にしよ(職工
ら)ん日、仲裁に入るもの
武場で舎弟側と職工側と
聞いたが、事内秩も遂知も来なかつた

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

67

のみならず、今まで何から何まで意見を叩き込まれた職工長達からも何の通知さへなかつた。どうせ斯うだらうとは思つたが、昨晩の鳴動までが一朝にして自分から離れて終つたのかと思つては何だか自分の今までにしてきた事が、総ての事が、皆な詰らない徒労であるやうに思はれてならなかつた。今にも五六百の職工達が押寄せて来て口汚なく自分を罵りながら石や瓦を此室へ投げ込んで、「裏切者！」「国賊！」とあ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

一行アキ

61

らゆる罵詈讒謗を逞うして戸障子を打ち砕い
て引摺り下ろすのでは無かろうかとも思つた。木
ガナよと呼んで駈迎した若者を一週間の後に
十字架に付けたエルサレムの民のやうに、自
分も今に猶等の手で十字架に付けられるの
をした猶等の手で十字架に付けられる
るのでは無いかとも思つた。
駭ろ田のトップりと暮れた頃、覚也が息喘
き駈け込んで来て、四助囲です、先生！ と
上り框に腰を卸し乍ら吐き出すやうに言つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
259

62

何が？、どうしたんだ？と旧友は少しアタフタした調子で言った。

「私（僕）は之（これ）から帝（みかど）劇場の怨（うら）み言へ行って来たんです。所（ところ）が全（まる）で成（な）って居ないんです。」

「それから職工側（がは）にも何か意見の一つ（位は）吐（は）かすのかと思ったら、頗（すこぶ）る神妙（しんめう）に黙（だま）り込（こ）んで了（しま）ひ、社長が成申（なりまう）し書（しょ）を朗読（らうどく）したあとで、拍手（はくしゅ）も我（わ）れ勝（がち）に大日本帝國は古来（こらい）……と型（かた）の如く言って、會（くわい）社は一つの家族（かぞく）である、社長は父で、重役（じうやく）は兄（あに）である。（以下次頁）職工は素（もと）より子であり弟であ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

108
-59

。若も子たり弟たる者が、父や兄に反抗すると
は不孝の子である、忠臣は孝子の門より出て
出なければならぬのだから不孝の子は即ち不忠不義
の臣である。十数回間職務を怠り、國賊同様の
者共に教唆されて驟ぎ歩くとは正に以ての外
のお越者に首く不忠漢であると言つて
五クです。夫りやア甚の演説には一通りの筋
道は立つてゐるが、しかし社長は自分達の飯妻
に教いては一口も言はないでは、會社から叱り付
けようとするのは不可い、飽迄神聖主義です

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

。とう〳〵職工達と大衝突で會合は滅茶々々でした今すこし誰かに柔かん双方を調停してやつたら無事に解決も出來たらうと思つたのでしたが、……もう今日限りで、いよ〳〵出勤しないものは解僱するよと云ふので、腕の強い連中はソロ〳〵抱約を破つて出勤しさうになつて居た所を、係と喰止めて居た所です。

也僧職工を無条件で出勤させるのも心外だし、会社解僱させるのも可哀さうだし、どうすれば宜いんでせう、先生！今晩中にでも何と

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

108
-59

65

が骨を折ってやってはいないでせうか、僕
はこれから鳴野君や大野君や辻田君達を訪問
して此宅へ集るやうにしますから、先生、一
つ何とか智慧を借して下さい！」
覚也は許へるやうに言つた。黙つて聞いて
居た田楽は、
「では、折ろうしよう。君は三木から南君の
所と春雄君の所へ行つてそれを急ぬ此所へ来て貰ふ
やうに言つて呉れ給へ。僕もみし恩ふ所があ
るから何とか一思案して見よう」。

原稿二〇（神奈川下出版）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「有難い、とろで此ろうそくを
実際は借路借さ〳〵ては労働者が氣の毒です。」
と言って覚也が帽子を取上げた時、チヤン
〳〵と半鐘が鳴つた。
「呀！」と二人が顔を見合せた時、大事の
鐘がゴーン〳〵と鳴り初め、「大事ぢやア。」と言ひながら表を東の方へ駆け行く人の足音が騒が
しく聞えた。
「大事ですよ。」と言つて表へ駆出さうと

08
59

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

057

した覚也を呼止めた田舎は、口裏の物干つ行つて見よう。一緒に連れ！正覚也は靴を三尺ばかり離れた所つ、片足々々に脱ぎ捨て、坐敷へ上つて来た、そして二人で裏の物干へ登つて行つた時は、既う王子の濱の方が真赤な火の雲が燃え上つて居た。口何所からう、心と田舎は棚干に片足をかけて伸上り〳〵見て居るうちに、口火事や火事や！えらいこと、製材所が火事やで！と言ふ聲が聞えた。落着い跡次

08
59

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

を走る黒い影か、いとうせ斯んな事が起るだらうと思つたよ！」と言ひながら人込の中へ混つて了つた。向手は其の時分を見計つて、附添手に取るやうに聞えた合図の叫声を合図と聞き違へたのだ。

「芝の先生、大変な事になりました。これから現場を見て来ますぜ。」と覚也が下へ降りようとするのを引止めて、「下へ行つて話さう！」と覚也も思ひ当る所があつたらしく、二人は

（株）二〇（新潮社）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

物乾場を降りて、玄関の直ぐこの室でお茶を飲みながら往来の人達の話を聴くとはなしに聴いた。

「そうそう一番大事の機械が焼けて了った。」

「もう第三工場からも出火したんなさうな。」

「随分な損害だらうよ。」

「死なとといふ声が聞えた。」

走る跫音

近所の若い者達が玄関へ来て、女中達を捉まへて手に火事の話をしたのであつた。

家を出て直ぐ下宿へ帰つた。

08
59

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

翌日から三日間に亘って警署では数名の職工を召喚して訊問したが、皆な疎取書を取られただけで還して呉つた。一人も拘留せらるゝ程度のものは無かつたが、しかし事件は容易ならず暗雲ん包まれて物凄く或物は或物を摸索して居た。

同盟も何時となく砕けて、五人十人と今迄へ続歸して行つた。或者は陸軍の示ノ職を求

08
59

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

一行アキ

むやくちった〻基本金の積立利を放棄して〻後の帰した職工達は一日十銭宛の給銀増額で皆な沈黙して了つた。会社側からは、基本金の大部分を積立金の方に組合に投資してあつたのが、出火の為に物品も帳簿も焼失してしまつたから清算の提出し得ないのを遺憾に思ふ。しかし本年分の利益金で何とか埋合せをするといふ意味の長い手紙を株主から職工から町の有志達にまで配付した。

怪しい火は種々の風説を産んだが、遂に七

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

十五日も暮ろ門に近まて、
えかけた頃、一人の若い男が
て甚くお萎れなから妄体を
回案は直接に出て行つて
ひは製材会社に御りて居る
の職工で、時々胃病か起こる
頼みた来る男であつた。
四ヶ山君か、又た胃が痛む？
いゝえ、一寸先生にお伺ひしたい事があ
りまして……

中藤三〇（製薬坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「然うか、此方へ上り給へ。」

と、小山を誘ふて面会室へ案内した。

「先生、私は今度裁判所へ呼出される事になりました。」と小山は泣かんばかりに打悄れて居た。

「えゝ？　君が……どんな事件で？」

「例の亀井の大事の一件で……」と。

「大事の？　今頃大木がどうしたとらかん

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「どうも折角ありませんが、何名かも調べられた中で、私一人が有力な嫌疑者になつて了つたのです。」

「夫れは、どうした理由だ？　君のやうな温厚しい人間が……」

「実は機械の番人としてあの晩、私は機械の番人として宿直に当つて居たのですが。十日も十五日も機械は動かさず、火の気も無いんですから、大丈夫だと思つて町へ来て……悪い事とは知りながら酒を飲んで遊んで居たんです。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「では、其の酒屋の主人に何時頃から何時頃まで其所に居たと云う事を證明して貰えないかね。」

「はい、夫れは慥(たしか)に三人の会社の方でも、ちゃんと調べてくれましたのです、しかし私が其の酒屋を出て三十分後に火事が起ったのです、しかも私の宿迄(やど)宿迄の間がですね、私はあの本郷の本郷の方から宿迄宿迄の間がパアーッ！と光るのを見て駈(かけ)出したのでしたが、私の行った時は最(もう)う機械室一面に火の海となってしまいましたの

です。

「何所の洒屋か知らないが、町から細所まで三十分で行けるか行けないか先ず詳細に調べて覚えんなれ。」

「へえ、契約の件調べては、走って行って十分、普通人歩いて二十五分と仰しゃるのですナ。」

「さうか、では俺が五分十分の余裕なんだナ。困つたなア夫れは！！」

を不快さうに見た。十山はホロ〳〵と涙を流

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

しながら、

「私には一人の年老った母親があるのんです。夫が最う長い間、病で苦しんみるんですが、一向先生には診察を頼てたいと云ってますが、何さま夫の事情も除々に悪くなって行くばかりで……」と其の女が涙ながらに訴えるのを聞いた私が監獄へでも入れようかと夫を思うと夜の目も寝られませんでした。

「そんな心配は要らないさ。身に覚えの無いものは飽まで覚えが無いと云う事が最う今

の時勢は昔のやうな推定裁判はしないからネ。

皆な證據裁判だから……そして其のおツ母さんとそよのは明白だから……どうでも此ノ通ふやうにと私つ、一すも心配な安いらないから……と云つて小山は切有難うございます……心と云つて小山は落つる涙を拭はうともせず、只私は警察でも區裁判所でも寢りに私と先生とを呼ばれたが、それは何故ですかと問ふも部長さんが、お前は重死で危險な書物を讀んだから……と尋ねられました。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

私は、いえ危険な書物なと配りなしません
と申しますと、法律と権威とふ小い本を
配つたらうと言はれるので、はア大なら私
は配りましたと申したすです。實は鳴野さん
から頼まれまして、どんな事を書いてあるの
かの中を探々見もしないで、あれを五十冊程
職工に配つたのです。部長さんが巡ら仰しや
るので、どんな事か語んで見たいと思ふので
すが、みの所には一冊も残つて居ません、
あ
尚ほ友達も皆な読ませ
たいで何所かへ収い込

千葉二〇（製紙水下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

んだり失ったりしてございますまいか。私は筆と清
どうぞ一冊下さいますまいか。私は筆と清
で見たいと思子のでございますが……
「君は又た甚の本を賊エん配いたと正直に
言ってしまうたのかい。」
「はい、悪い事なとは思いませんから、明
の野さんの仰しやるには、これは田原先生が翻
譯した大變有益な本だから……」
「えゝ？　僕が飜譯した？　君は言ったのか。
あの本を……」と小山の言葉を遮り、田原

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

821

は椅子を掴み上げ身体を前に屈めた。

ええ、然う申しましたのですが、あれは先生の冗談やアこさいません。

ム……ム……ム田系は十山の尭を睨んで居ます。

たが、日可愛い男かナ君は。そんな男が獄へ入れられるやうではお仕舞の中な闇かよ。

ええ、マサカ監獄へ入れられるやうな事は無からうと思ひますが、私は裁判官の方が恐ハキく〳〵と受答へか出来ないから、伯父を頼んで一緒に行つて貰はうと思ふんです。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

82

の夫を失いながらう、
決して敵討なんかしないでも許すならう。」

「さうでございませうか、」と十山は
暫く考へ込んで居たが、「私の先生、あの晩私は
松原の所で妙な者を見たんです！」

「妙な者？　どんな者？」

「まだ松原の所へ来ない、去れは？」

「また松原の所へ来た時、私と揉み合つた黒い法衣を着た男と出逢つたのです。本當に夫れは不思議に、サッ！　と私の眼の前を通つた
のです。私は其人の顔も姿もチャーと覚え

（原稿用紙 10 行 20 字詰）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

てみます。夫は確かに私で
す。しかし此事は先生にも誰にも申上がない
で、唯、私の夢の如くして置きませう。夫れ
から工場の近くの人達は大事の前にドーン！
と大きな音がしたと言ひますが、夫れもタン
クが破裂したんだと私は言つて置きました。
……先生、では明日から相又と二人で行つ
て参ります。
ますますから、母の事を宜しく頼みます。
山は何卒も〳〵頭を下げてトボ〳〵と出
て行つた。把握は言葉の所要で見送つたが、

（原稿用紙二〇〇字詰）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「小山君、一寸待ち給へ！」と言つて薬局へ入つて行つて、薬袋の中へ五円紙幣を一枚四つに折つて入れた。

「これは君、餞別の薬だよ」と言つて田原が夫れを小山の眼の前へ突つけた時、小山はアッと云ふ気の無い迷惑をしながら夫れを受取つたが、指先で二三度揉くり廻して見て、「こんな事は……」と言つて、其の袋を置の上に投げるやうに措いてスタスタと出て行つた。

田原は別に追かけもしないで、「正直な男が

と言つて袋を取上げた。そして薬局へ
入つて行つたが、間もおいず、手に、薬包へ電話をか
けて二ンサンカマを一ポンド位ず持つて来るや
うに言へと。
臺所に居た手伝ひ婆は直ぐ十リコ〳〵と電話を
かけた。暫くして薬局の小僧が自轉車で駈け
付けた。そして通帳へ矢立の筆で記入しなが
ら、「この塩沒を能く使ひますノシと言つた。
「そんなに澤山使やしないからう？」と云つた
家は何の氣無しに甚の通帳を手に取つて繰辺

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

一行アキ

して見ると……旦、エニサセ加里ニホゼだ、
焼香（やきこう）
鵜冠五……分、硫黄……
のやうに眼の前に閃いた。
の使は誰か……と問はうとしたが、ぐいと
甚の言葉を呑込んで、
了つたが……の先生、あの眼
者を見たんです！」と呼
言葉を憶ひ出して、がつ
望る旦は朝から雨も降り風も吹いた。三輪
崎から乗船する積りで
船待をしてゐた乗客は、

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

午前十時頃に白船は風柱の
港しないと云う電報が
ツツ〜言うから勝浦まで車を走らせた。
山本伯父と二人で三崎の片田屋という宿
で休んで居たが、船が着かないと云うので明
日に延ばそうかと言ってみる所へ、陳宅の者が
白波の云うには、姉はもう船は来ない
かも知れないですよ。と言つて居れた。
夫れでは就利所この出張所
迄走らせた。

若し出様な事があつて若しもの事ならと思つて二人は早速

船に乗った。
丸川丸という三百二十噸の船は勝浦港をおそまきながら出港してから三十分も経たないのに揺り出した。
風と共に波が高まって来る。
大地の峯々も木の葉のやうな小山は一堪りも無く霧の腹を空にして了った。
船は十二時過に串本港へ入って其所で五時まで停船すると言ってみんなが、二時頃から天候が悪くなったとかで投錨した。しかし
（この船長は大阪にも其所を知れる船長なり）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

船が潮の岬を越した時は、最う三等船客に生きた意もの は一人も無かつた。毎日の航路に慣れた ホーイさん、ホーイさんと組 う三四人から素人声を聞かされ を慰んで、両足を踏ん張つて座た が、稍ともすると、スウーと身体 が招れて仰向に寝そべつた。甚所で必ず唱 を聲かよもの、念仏を唱つるもの、血を吐く もの、若い女も年寄も、看物がまくれて、次 も露はになつて、右たたに轉々と輾転さ れ

（船客取下山羽鋸）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

初めた。

「苦しい！　苦しい！」と呻吟きながら小山は鬱捌の籔に躯りついて畳に噛み付くやうにして危く轉ぐのを免れてみた。「こゝはエろい、やりかんん！」と言つて伯父は起きて位置を換えようとしたが、どうしても半身を起す事が出来なかつた。

「南無阿弥陀々々々々……」

「助けて呉れ！」

「皆な甲板へ出よう、こんな所に居ちやア

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

おやみ
無闇んだ
きな声

友等
次第に消した時、皆な死んで
しまう様な気がして起きる事も出来ない
自分と自分を
に声を励まし有かち叫んだ
しかし脇々と叫び疲れて
り伝ら問えて居ると恐怖
皆な黙って軒が
て来た。垂注いても叫んで
なの心た統合の安神かあつ
も人声のする時
所には
も船長を呼べ船長を！
もすつと沖へ船を出してろつ！

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

92

一頁（しき）

上

甲　沈（しず）みはしない！　こんな浪（なみ）で沈没する
ものか。皆（みな）な勇気を出せ。歌を歌え！　歌を！
甲　馬鹿（ばか）！　皆な上着（うわぎ）を脱げ！　女の市は帯（おび）を
と　解いて我（なる）たけ身軽（みがる）になりなさい！
甲　おい、おーイ！
乙　は？
甲　おーい！
乙　声（こえ）を揃（そろ）えて叫んでみたが、
　　てうつた。荷物（にもつ）が軽（かる）くなつ
　　いつて来る。牛稈体（ぎうかんたい）になつた女の足と足とが打（ぶ）つ
　　かり合（あ）ふ。
乙　腰と腰とが
乙　頬と頬とが
　　ぴつたりと合（あ）ふ。
　　信玄袋が頭に蓋（ふた）か
　　ぶさつて来る。牛稈体になつた女の足と足とが打（ぶ）つ
　　かり合（あ）ふ。
　　は？、乙
　　口々に叫んでみたが、声（こえ）は（も）低（ひく）く小（ちい）さくなつ
　　て来（く）る。信玄袋が頭に蓋（ふた）か
　　ぶさつて来る。牛稈体になつた女の足と足とが打（ぶ）つ
　　かり合（あ）ふ。
　　腰と腰とが
　　頬と頬とが
　　ぴつたりと合（あ）ふ。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

下

その人達、丈夫か若い女であらうが、年寄であらうが、裸体であらうが、襦袢一枚であらうが、無我夢中で、皆な眼を閉かれます手を握り合ひ衣を抱き合ひ、近寄れば猟犬嚙みつき、腰縄を掴み合ひながら、いつの間にか皆な一所に固まつて居た。

山は偶と眼を開けて忽ち周囲を見ようとしたが、唯其所から一面に黒い髪の紛るさまと、白い首と、裂けた唇とが幾つも〳〵重なり合ひて、直ぐ

ぐ眠が眩んで、何にも見えなくなった。

グーッ！　と船が何方かへ傾いたと思ふと、山は誰かの脳か自分の首に捲付いて居る、

のを知った。息が詰るので首を横に捩ぢ廻さうとしたが脱け益々堅く締めつけた。其の腕を掴んで除けようとしたが、両手は誰かに確手と掴まれて仕た。足を跼って見ようと思ったが、甚だしは縦つもくく人の身体が重り合ってゐるらしかった。

ゆうーん！　とカ一杯絞の仰反ったと思ひ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

ふと何所かで、ガーン……と恐ろしい響がした。ワアーッ！と人の泣くやうな叫びが聞えた。

「伯父さーん！」と云はうとしたが、急に苦しくなつて咽喉（喉か）へ迫つた。夫れは汐水（しほみづ）を飲んだのであつた。

小山は力のあらん限り手を振つたり足を振つたり頭を左右に掉（ふ）つた。そして衝（つ）と首に捲付（まきつ）いて居た腕が除（と）れ両手両足が自由（じいう）になつたと思つたが、最（も）う身体は何（ど）うする事も出来ない程

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

寄別13-60

水泳切つてゐた。しかし子供の時から水泳が上手であつた紘は息を詰めながら要塞に頭を挿つた。冷いものがピタリと背から猶付いて来たが、もう夫れを振放さうとする雪氣も無かつた。

天地の震り返るやうな音響な危怪な響が頭にグーンと響いたと思ふと小山の身体は何百尺も高く投出されたやうに感じた。夫れは正宗のやうな鋭刀で、頭の頂邊から足の尖まで縦に断割られてゐた。

スカリ！　と音がして

96

つたやうな感じであつた。

「あゝ！」と思つた拍子に、小山は突然眼界から消え去つた。

瞬間と自分自身の全裸体を見たっきりも失れは今までのやうな痛みこけた自分。では無く、力に充ち血汐に溢れた美しい青年の自分であつた。

雪のやうに白い肌が美しい自分の傍に近寄つたと思ふと小山は本能的に甚だ可愛い人魚を堅と抱きしめた時、紺は生まれ初めての歓喜

という事ものに打つかつたのであつた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

甚時(そのとき)彼(かれ)は最(もっ)う時間(じかん)も空間(くうかん)も無(な)かつた。恐(きょう)怖(ふ)も危難(きなん)も無(な)かつた。水(みず)と陸(りく)との区別(くべつ)もなかつた。唯(ただ)もう芬烈(ふんれつ)な肉(にく)の香(か)が彼(かれ)の全性全霊(ぜんせいぜんれい)を包(つつ)んでしまつた。此(この)美(うつく)しい瞬間(しゅんかん)のうちに彼(かれ)は新(あたら)しい不可思議(ふかしぎ)な世界(せかい)に(健康も忘(わす)れ)眷(けん)属(ぞく)にも(情愛)も擅能(たんのう)した。しかし(やがて)彼(かれ)は(また)意識(いしき)を取(とり)返(かえ)さうとした時(とき)、彼(かれ)の前(まえ)には恐(おそ)ろしい怪獣(かいじう)のやうな醜(みにく)い顔(かほ)が十(とう)も廿(にじう)も、怪(あや)しい声(こえ)を立(たて)ながら呻吟(うめ)きながらユラ〳〵と軒(のき)が(今(いま))にも落(おち)て来(こ)た。しかも夫(それ)は皆(みな)な呪(のろ)ひに満(み)ちた怨(うら)めと怒(いか)りの(と怒と)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用